The COLUMN

労働社会の仕組みは社会の基盤

立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科特任教授　内山　節

将来どんな仕事をしようかと子どもなりに考えはじめたころ、なぜ仕事はその人の性格や雰囲気まで変えてしまうのだろう、と思ったことがあった。周りの大人たちをみると、教師は教師風、警官は警官的、役人も商人も農民も、誰もが仕事と結びついた性格や雰囲気をもっていて、民間企業のサラリーマンたちも、いくつかの類型に分けることができた。

仕事や労働は、経済や収入だけで考えてはいけないとそのとき思った。私たちは仕事をとおして自分をつくり、それが社会の雰囲気に反映する。労働社会の仕組みは、社会の基盤である。

高度成長期に、いわゆる日本型雇用が定着したとき、日本の社会はサラリーマン社会の雰囲気をつくりだしていた。所属する組織のことを第一に考えながら活動するスタイルも、提案、会議、合意、分担という流れをあたりまえのこととする精神も、自分の活動に対する組織的評価を求める心情も、元は企業労働の、それも終身雇用下の企業労働がつくりだしたスタイルである。それが社会全体にひろがったのが、戦後の日本型サラリーマン社会であった。

問題は、大多数の人々にとっては不幸なかたちで、このスタイルが転換期を迎えていることである。安定雇用からはじきだされた人々は、パート、派遣、フリーターなどの名称で社会に堆積し、安く労働力を提供するだけの人々になってしまった。それは、「格差社会」の成立だけにとどまらない影響を社会に与える。フリーター的雰囲気をもった人々がふえていく。計画や意思決定システムから排除され、安い労働力をその都度提供するばかりになった人々の増加は、私たちの社会を、日々の成り行きで動く社会へと向かわせるだろう。

成り行きで政治を選び、成り行きで消費し、日々の生活を送る。この雰囲気に適応した流通や販売、情報の仕組みが定着し、そこから「新しい時代」がつくられていく。他方、市場での競争にあけくれる人々も、自分がかかわるだけの世界、その意味で閉じられた世界に身をおきつづけることによって、我がことにしか関心をいだかない雰囲気を、社会にひろげつづけるだろう。

戦後のサラリーマン社会の問題点がみえはじめた時期に、私たちはどんな労働社会をつくりはじめたらよいのかを、仕事のあり方と人間の形成、その社会への反映をふまえて議論すべきだったのである。ところがその議論がないままに、市場経済の要請だけで労働社会を変えてしまった。その結果、いまでは、さまざまな負の蓄積が社会のなかにたまっている。

もちろん、新しい働き方や暮らし方をつくりだそうとする多くの人々が活動しているのも、また現在の一面である。私自身、一年の半分は群馬県の山村で暮らしているし、村に帰れば自然や畑、村の人々が私を支えてくれる。そして村には、村の人口の一割ほどの都会出身者が、いろいろな仕事をしてくらしている。私が代表をしている東京のＮＰＯ法人でも、５人の専従職員がボランティアと一緒になって頑張っている。知り合いの宮大工さんのところには、一年間に何十人もの弟子入り希望の若者が訪れている。その点では労働についての新たな模索は、確実におこなわれているといってもよい。

だがそのような動きも、現在の日本の労働社会のあり方に見切りをつけるかたちで、進行しているのである。見切りをつけた人々が、自分で働き、生きる世界を創造しようとし、それゆえ、多数派の世界では、この模索する動きと無関係なかたちで、サラリーマン社会の変貌がすすんでいく。

私たちはどんな社会をつくりたいのか。労働のあり方は、この問いのなかにある。